法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

在アルゼンチンコリアン移民文学の形成と展 開様相

金, 煥基 / KIM, HWAN GI

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)
13

(開始ページ / Start Page)
67

(終了ページ / End Page)
92

(発行年 / Year)
2012-04

https://doi.org/10.15002/00007848

(URL)

在アルゼンチンコリアン移民文学の形成と 展開様相

韓国東國大学日語日文学科副教授
金煥基
KIM HWAN GI

Iはじめに

本研究は地球村時代の'脱境界'的な世界観を直視し、コリアンディアスポラの文学地形図と連係し、在アルゼンチンコリアン移民文学の形成と文学的特徴を考察するのが目的である。従って、広くはコリアンディアスポラの形成過程と中南米に定着したコリアンたちの文化的特徴を辿り、狭くは在アルゼンチンコリアン移民文学の形成過程と文学地形を検討することになる。特に堅固な中心/周辺に変奏されるアルゼンチンの社会構造でコリアン移民者たちが発刊した情報誌、文芸雑誌、個人的な創作集などを具体的に取り上げながらその文献に形象化された移民者(ディアスポラ)特有の内面的情緒を探ってみる。また、このような南米地域(ブラジル、アルゼンチン)のコリアンたちの発刊した多様な出版物に対する資料紹介とその内容的な検討が最近韓国社会や韓国現代文学史にどんな意味を持つのかについても検討することにする。更に本稿は2011年韓国中南米研究所の学術誌『中南米研究』に発表された「在ブラジルコリアン文学の形成と文学的アイデンティティ」の延長線で研究されたことも明かしておく。(1)

Ⅱ在アルゼンチンコリアン社会の形成と文学

1. 移民の始まりと展開様相

周知の通り、コリアンディアスポラの歴史は19世紀中頃、新しい定着地を求め満州と沿海州への移住から始まる。これらの歴史は旧韓末に農民と労働者たちの中国・ロシア・ハワイ行き、日帝強占期に農民と労働者たちの満州と日本行き、1945年から韓国政府の移民政策による戦争孤児、米軍と結婚した女性、混血児、家族との再会、留学生のアメリカとカナダ行き、1962年から現在までの定着を目的にした外国行き(ドイツへの労働者、南米への農業移民)として説明することができる。⁽²⁾

コリアンたちが南米に移住し始めたのは1962年からだが、アルゼンチンへの移民は1965年に本格化した。アルゼンチンは南米大陸の12ヵ国中で、ブラジルに続いて二番目に広い国土(南韓国の約28倍)を誇る国家であり、主な宗教はカトリックであり、公式使用言語はスペイン語である。 (3) 度重なる政治不安による国民経済の沈滞にもかかわらず、"南米会員国の相互間での関税引下と共同経済政策の推進、域内政治・経済統合"をスローガンに《南米国家連合》(USAN)の出帆とともに地球村の中でも重要な国として認識されている。また、アルゼンチンはコリアンたちがブラジル(5万余名)に続き、二番目に多く定着した国家(2万2千余名)でもある。(4)

在アルゼンチンコリアンたちの移民の歴史は、『アルゼンチン韓人移民25年史』 (5) に基づいて検討すると、大きく四つの段階に分けて考えることができる。初めに、1965年に公式的にコリアンたちの営農移民が始まる前からアルゼンチンに定着して住んでいた移民者たちである。ここでは、日帝強占期と韓国戦争以後にアルゼンチンに入ってきた場合だが、前者には1941年に日本の外航船の船員資格で入ってき

たイ・チャソン(韓人移民の梟首として知られる)と彼の婦人ソン・キョンジャ、イタリア出身の男性の婦人カン・ヨンレ (6) がいる。そして、後者には韓国戦争が終わった後、UNの斡旋で1956年・57年に入ってきた反共捕虜として12名 (7) が該当する。彼らは実際的に解放以後コリアンたちの公式的な農業移民団がアルゼンチンに入り、定着するのに実質的な役割を担当するのである。

二つ目は、1965年に公式的にコリアン営農移民団が最初にブエノス・アイレスに到着した時から1980年代の在アルゼンチンコリアン社会が中産階級に根をおろすまでである。この時期は、最初のコリアン集団居住地域であるレッティでバラック集落の生活、第2の貧民村ビジャッソルダッティでの定着、109村時代の開幕⁽⁸⁾、バリオッテルッキ団地での生活、'76番'終点での生活、ラマルッケ農場をとりまくコリアンたちの移住の歴史と定着ドラマが該当する。そして、1970年代に入り、在アルゼンチンコリアン社会は109村を中心に衣類製品業が頭角を表しながら製品業を土台に多様なサービス関連業種を創出させた。

三つ目は、1980年代の衣類生産と衣類販売業の成長に助けられる形で開幕された本格的な中産階級時代である。構築された経済力をもとにビジャ村から一般住宅への移住、新しいコリアンタウンの形成、オンセ中心の衣類商たちの活躍、反物卸売り商たちの躍進、衣類商による地方市場の開拓、韓国人学校の設立、「僑民社会」の再建、自家用時代の開幕などは、変貌する在アルゼンチンコリアン社会の力動的な雰囲気を代弁するのに十分である。一方、1980年代はドルの波動、契(主に経済的な協力と親睦を図るために作られた伝来の協同組織)の波動、金融の波動と異常景気を自ら体験することになり、母国訪問と余暇の活用が加速化され、子供たちの同化問題を初めとして、それこそ移住の歴史に伴うしかない民族意識、自己アイデンティティに対する苦悩も少なくなかった。

四つ目は、1980年代後半に目立つようになった"投資移民の大挙流

入"である。1980年代後半、アルゼンチンの経済は慢性的な労組のストライキ、経済政策の破綻で希望的にはなれなかった。しかし、1980年代の初めから急成長したコリアン社会の衣類製品業はすぐに'新移民(投資移民)'の大挙流入を導いた。1985年からなだれ込んできた新移民は、"2、3年の間に既存の僑胞人口の2.5倍(3万6余千名)に増える"ほどであった。結局、これら'新移民者'の大挙流入は、在アルゼンチンコリアン社会の多様な変化につながった。特に、新移民者'たちを中心に衣類業界の専門・細分化、病院、不動産、食品の卸売り、銭湯、飲食店など業種開拓が目立つようになり、宗教界の多辺化、日刊紙の創刊、有線放送局の開局のような言論媒体も登場した。一方、'新移民'の大挙流入は、逆に新移民と旧移民間の葛藤、改新教会の波動、子供の教育問題、民族問題、自己アイデンティティのような根元的な問題点も一層表面化させた。

概略的にアルゼンチンのコリアン社会の移民の歴史を整理してみたが、我々はここでいくつかの側面から注目する必要がある。一つは、在アルゼンチンコリアンの移住史は、ブラジルに向かったコリアンたちの移住過程(性格)と似ているということである。例えば、少数ではあるが、日帝強占期に定着した移住者が存在し、解放以後に中立国を経由して入った反共捕虜の移住、1960年代、韓国政府の政略的な移民政策による移民、衣類産業を中心にした職業群の形成などがそうである。そして、南米へのコリアンたちの移民史を通して韓国近現代史の歴史的、政治的、理念的な支点を客観的に多様に読み取ることができる。日帝強占期と'朝鮮人'の位置、韓国戦争と反共捕虜の関係、祖国の経済難と移民政策などに内在する国家と民族、歴史と政治のイデオロギーがそうだ。また、南米コリアンたちの移住の歴史が半世紀にわたっているが、相変わらず経済的な成長の裏に位置している精神的貧困、居住国/主流に対する堅固な'壁'が存在するという点である。特に、経済的な安定(中流階級の拡大)、多様な職業群の形成とは別

に精神的な貧困、子供の教育、民族意識、自己アイデンティティを取り巻く世代間、階層間の葛藤などの問題は依然として解決課題として残っている。

いずれにせよ、最近の韓国の国際的位相とこれからの役割を考えたとき、南米行きを選択したこれらのコリアンたちの移民史は特別な意味をもつしかない。新自由主義の政策を先に立たせたブラジル社会の混種支点を直視して、アルゼンチンの潜在力を確信しながら、南米コリアン社会が構築した多様な形態の成功神話、共同コミュニティーの構築、精神文化的遺産は、急激な多文化社会として再編されている韓国社会に投げ掛ける意味が少なくないからだ。また、南米大陸でコリアン社会が構築した文学活動に対する体系的な資料調査とそれらに対する具体的な分析を通してコリアンディアスポラ文学の一つの軸を構築するという点も看過することはできない。

2. アルゼンチンで結成されたコリアン文人団体

前述したように、アルゼンチンのコリアン社会はブラジルのコリアンタウンの形成過程と同じく、草創期は農業移民から出発し、衣類産業を中心に急成長した。特に1970年代に109村を中心に急成長した衣類製品業は、本国の専門職の中産階級を引き込んで多様な形態の新種産業を創出させながら、在アルゼンチンコリアン社会の核心産業として落ち着いた。そして衣類製品業の活性化は経済的な安定と共に、公務員、弁護士、医師のような専門職と多様なサービス業を創出しながら、自然に外部の世界と現地社会との疎通につながり、共同コミュニティーの構築を促進させた。いわゆる"個人と個人はもちろん団体間の交流と異文化との疎通に必要な各種情報媒体と組織"(9)を必要としたのである。

在アルゼンチンコリアン社会に組織された最初の団体は《韓人会》 (1966年3月設立) (10) である。その後、続いて《僑民会》(1967年設立、

『僑民会報』発行)、《集まり、ウリドゥル》(1972年設立、『ウリドゥル』 など発刊)、《109編物自治会》(1973年設立、『109編物自治会会報 | 発刊)、 《在亜文人協会》(1994年設立、『ロスアンデス文学』発刊)、《銀河舞踊団》 (1976)、《韓人婦人会》(1985)、《専門人協会》(1989)、《韓人霊園管 理協議会》(1990)、《安全保護会》(1991)、《老人会》(1991)、《大韓 体育会》(1991)、《移民文化研究会》(1994)、《無窮花(槿)合唱同》(1995)、 《韓人医師/医大生会》(1996)、《韓人青年会》(1997) などが組織さ れた。そして故郷の集まり、同門会、郷軍団体、宗教団体、親睦団体 も組織された。また最初の有価週刊誌『僑胞通信』(1977)を初め、『週 刊韓国人』(1978)、『韓・アルゼンチンタイムズ』(1985)、『週刊東亜』 (1986)、『コリアジャーナル』(1987) などが発行され、最初の日刊紙 『南米日報』(1987.12) を初めとして『アルゼンチン・韓国日報』(1988)、 『アルゼンチン・中央日報』(1991)、『アルゼンチン・朝鮮日報』(1997) が創刊された。もちろん現在のアルゼンチン《韓国学校》の母体であ る《アルゼンチン韓国教育院》(1987)の成立を通した'僑民社会'の 民族教育と各種インターネットのホームページ (11) を通した情報提供 と相互疎通も看過する事のできない文化支点である。

これらの団体と情報媒体の成立と創刊目標は在アルゼンチンコリアン社会の権益保護、福祉増進、親睦企図、相互扶助、情報交換、民族的結束などであったが、これらの団体と情報媒体の中でも青年団体である《集まり、ウリドゥル》(1972) (12) と《在亜文人協会》(1994)の結成はそれらの社会の精神文化を引っ張り、文化的アイデンティティを構築するのに中心的な役割をはたした。まず、《集まり、ウリドゥル》は『ウリドゥル NOSOTROS』、『月刊ウリドゥル』、『週刊ウリドゥル』のような機関誌を発刊し、「僑民社会」が切望していた情報媒体として確固としてその座に着いた。そして《集まり、ウリドゥル》は〈韓国学生民俗紹介展〉の開催と『ウリドゥル文庫』の運営を通して、「僑民社会」の"精神的架橋"として役割を果たした。このような《集

まり、ウリドゥル》の〈韓国学生民俗紹介展〉開催と『ウリドゥル文庫』(蔵書3千余巻所蔵、1987年)の運営は在アルゼンチンコリアン社会で開催された最初の文化活動であったという点と、移民者たちの精神的な安息先だったという点で意味が大きい。

在アルゼンチンコリアン社会でもうひとつの画期的な出来事は、《在 亜文人協会》(1994)が組織され、機関誌『ロスアンデス文学』を発 刊したという事実である。『ロスアンデス文学』は、2011年現在まで全12号が発刊されたが、1996年9月に発刊された創刊号には詩、随筆、小説だけが紹介された。しかし『ロスアンデス文学』は発刊回数を重 ねながら、評論、シナリオ、翻訳に至るまで多様な形態の文学ジャンルを披露し、総合文芸誌としての位置を確立させた。例えば、在アルゼンチンコリアンたちの移民の歴史と定着ドラマ、つまり移民草創期のつらい生活苦、主流/中心に対する非主流/周辺としての異邦人意識、異文化との衝突、「僑民社会」の和音/不協和音、子供の教育問題、世代間の葛藤、故郷(祖国)に対する郷愁など、コリアン移民者たちの歴史的、経済的、精神的苦悩と彷徨、安息先に対する渇望を文学的に見せてくれた。

Ⅲ在アルゼンチンコリアン文学の展開様相

1. 文芸雑誌『ロスアンデス文学』

《在亜文人協会》が発刊した『ロスアンデス文学』は在アルゼンチンコリアン社会の精神文化的求心点として"精神的架橋"的な役割を忠実に受け持ってきた。特に'僑民社会'の痩薄した精神文化的環境を直視して、主流/中心の外郭支点で感じるしかない'壁'の重さを文学的想像力で紐解く事を試みた。本章では在アルゼンチンコリアン社会の唯一の文芸雑誌『ロスアンデス文学』の形式と内容を初めとして文学史的意味を検討することにする。まず、『ロスアンデス文学』の形式と内容を概略的に整理してみると次のようになる。

ロスアンデス文学												
号数	雑誌名	発行人	発行処	表紙作品	編輯委員	内容	発行日	總ページ				
創刊号	ロス文学ア ンデス	イム・ドン ガク	在亜文人 協会	〈彷徨する人々〉 (チョ・ビョンファ)	筆者全員	詩47編、 随 筆 40編、小説3編	1996. 9.	389				
通巻2号	ロスアンデス	キム・チュ ンジャ	在亜文人 協会	〈列外者〉 (チョ・ビョンファ)	筆者全員	詩53編、随筆 22編、小説2編、 翻訳詩5編	1997. 9.	337				
通巻3号	LOS アン デス文学	チェ・ウン	在亜文人 協会	〈合=合-分=分 -No.106〉 (キム・ユンシン)	シム・コンジョン、 イ・ホンヨン、シム・ ギョンヒ、孟夏麟	詩46編、 随 筆 29編、小説2編、 翻訳詩7編、 翻訳随筆2編	1998. 10.1	299				
通巻4号	LOS アン デス文学	シム・ギョ ンヒ	在亜文人 協会	"アンデス山脈"(編 集部)	イム・ドンガク、パ ク・ヒョンヨン	詩39編、 随 筆 26編、小説3編	1999. 101	331				
通巻5号	ロス アンデ ス文学	シム・コン ジョン	在亜文人 協会	"アルゼンチン作家Rita Branaの木を素材にしたモザイク画'Tango'と韓国のタルチュム" (イム・ドンガク)		詩73編、随 筆 25編、評論1編、 小説2編	2000. 12	349				
通巻6号	ロス アンデ ス文学	パク・ヒョ ンヨン	在亜文人 協会	標題 (イム・ドンガク)	シム・ギョンヒ、イ・ ギウン		2002. 8	172				
通巻7号	ロス アンデ ス文学	キム・パン ソク	在亜文人 協会	標題 (イム・ドンガク)	シム・ギョンヒ、パ ク・ヒョンヨン	詩47編、 随 筆 24編、小説6編	2003. 7	314				
通巻8号	ロス アンデ ス文学	ファン・ユ シュク	在亜文人 協会	"梅花"(チェ・ヨン シュク)	パク・ヒョンヨン、 イ・ホンヨン、イ ム・ドンガク、シム・ ギョンヒ、チェ・ウ ン	詩51編、随筆 17編、小説4編、 翻訳詩1編、翻 訳小説3編	2004. 9	284				
通巻9号	ロス アンデ ス文学	イ・ギオン	在亜文人 協会	〈私たちが花のよう に生きていくとき〉 (キム・ラン)	イ・ギオン、ス・ サンヒ、チョン・ミ ファ	詩43編、 随 筆 26編、小説3編、 翻訳小説1編	2005. 1	312				
通巻10号	ロス アンデ ス文学	孟夏麟	在亜文人 協会	"韓国の野生花で ある'錦嚢花'" (編集部)	シム・ギョンヒ、チェ・ウン、パク・ヒョンヨン、ファン・ユスク、チョン・ファ	詩15編、 随 筆 26編、小説2編	2006. 11	172				
通巻11号	ロス アンデ ス文学	チュ・スンド	在亜文人 協会	〈EI munro de News News〉 (チョ・ヨンファ)	ノ・ヒョンジョン、 パク・ヨンチャン、 ス・サンヒ、 曺美 姫	詩33編、 随 筆 25編、小説1編、シナリオ1編	2007. 11	222				
通巻12号	ロス アンデ ス文学	パク・ヨン チャン	在亜文人 協会	標題 (ノ・ヒョンジョン)	パク・ヨンチャン、 イ・セユン、ノ・ヒ ョンジョン、チュ・ ソジョン		2009. 12	206				

表1、『ロスアンデス文学』(創刊号-通巻12号)の形式と内容-筆者

左の表1の通計を土台に、文芸雑誌『ロスアンデス文学』の形式的な構成と内容的な面を整理してみると次のようになる。一つ目は、『ロスアンデス文学』は発刊回数が重なるにつれて、雑誌名、編集委員、発行日に若干の差が見られるが、全体的に雑誌形式と内容面で一貫性を維持した。具体的に見てみると、文芸雑誌のタイトルが『文学アンデス』(創刊号)、『ロスアンデス』(通巻2号)、『LOS アンデス文学』(通巻3.4号)、『ロスアンデス文学』(通巻5-12号)に代わり、編集委員は執筆者全員が編集委員であった草創期(通巻2号まで)とは違い、『LOSアンデス文学』(通巻3号)からは該当年度の発行人中心に構成された。また、毎号の発行人は《在亜文人協会》であり、発刊日はだいたい毎年下半期(7月-12月)であったが、流動的であったことがわかる。(但し、2008年は未発行)

二つ目は、『ロスアンデス文学』は毎号その年の《在亜文人協会》会長(発行人)のあいさつ、文人協会沿革、協会会員たちの連絡先を載せ、特別に表紙に絵を入れた。《在亜文人協会》会長のあいさつの中には、毎号の『ロスアンデス文学』が誕生するまでの苦衷と感動が込められており、毎号《在亜文人協会》の沿革と会員たちの連絡先を紹介することで、『ロスアンデス文学』の歴史的、文学的意味はもちろんのこと、連続性を強調しようとした。また、『ロスアンデス文学』は毎号表紙に絵を入れたのだが、その表紙の絵にはコリアン移民者たちの刻苦の哀歓、強靭性、希望のイメージを表象したともいえる。

例えば、「彷徨する人たち」(創刊号)、「列外者」(通巻2号)、アンデス山脈の写真(通巻4号)、「ろうそく」(通巻7号)、「梅花」(通巻8号)、キム・ランの「私たちが花のように生きていくとき」(通巻9号)、「韓国の野生花'錦囊花'」(通巻10号)、そして、"アルゼンチン作家 Rita Brana の木を素材にしたモザイク画 'Tango'と韓国のタルチュム統営五広大遊び"(通巻5号)、"強烈な異国的体験を Algarobo 木と Onix 石を素材にして造形言語で実現している特有の合 = 合 - 分 = 分シリ

ーズで時空を超越した自己芸術世界の永続性を表現"した彫刻(通巻3号)、"長い冬の凍った地面の中では眠りにつくように根をおろし/春の兆しに青い目を出し/麦という実を結んだ強靭性を表現/私たち移民者たちの強靭性の中に留まりたい/文学の精神を表現"した絵(通巻12号)、"一つの空間の中に流れていった時間、現在そして事実、ファンタジーをモザイク技法で表現"した作品(通巻11号)がそうである。

三つ目は、概して『ロスアンデス文学』の内容構成は詩、隨筆、小説を中心に編集されているが、数少ない文学評論、シナリオ、アルゼンチン作家の作品を翻訳して紹介する。実際、前の整理表1からも確認できるが、『ロスアンデス文学』(創刊号 - 通巻12号) に掲載された文学作品は、詩(544編)、隨筆(304編)、小説(31編)が大部分を占めている。そして、評論(通巻5号)とシナリオ(通巻11号)が一編ずつ載せられ、アルゼンチン作家の詩(通巻2,3,5,8号)(13)、隨筆(通巻3号)(14)、小説(通巻8,9号)(15)を時おり翻訳して載せた。しかし多様な形態の文学作品が紹介されたが、依然として在アルゼンチンコリアン社会の多様性と越境主義を表象することのできる文学的想像力は心残りである。

四つ目は、『ロスアンデス文学』の執筆者が殆んど《在亜文人協会》会員に限定されているという点である。創刊号から通巻12号までの執筆陣がすべて《在亜文人協会》会員であるという事実は、一方では在アルゼンチンコリアン社会の堅固な凝集力と相互交流の象徴とも言えるが、一方では脱境界的な'混種性'にふさわしい文学的想像力の不在、閉鎖的な社会構造の表象として読み取れる。移民文学ないしディアスポラ文学特有の超国家的な視座で文学的普遍性を開いてゆくとき、南米コリアン作家たちの相互交流はもちろん、居住国の現地文人と作品との疎通体系を構築するのは必要である。例えば、"韓国人僑胞社会の内的成長"と"文学的葛藤を克服できる「精神的架橋」"(16)としての

役割をしていた在ブラジルコリアン社会の総合文芸雑誌『熱帯文化』⁽¹⁷⁾ が詩、隨筆、小説を初めとして評論、紀行文、シナリオ、コントを掲載し、ブラジル文学の韓国語翻訳(韓国文学のポルトガル語翻訳)、 米州文学との交流、日本人作家との文学交流展など、多様な形態の文学的想像力を通して空間疎通を実践したことは示唆するところが多い。

五つ目は、『ロスアンデス文学』に紹介された文学作品は、概して 故郷(祖国)意識、疎通と共生、ヒューマニズムを描写している。そ れらをジャンル別に整理してみると、詩では故郷(祖国)に対する懐 かしさ、南米の大自然讃美、宗教的ヒューマニズム、在アルゼンチン コリアン社会の日常が描かれている。小説では故郷に対する郷愁、民 族意識、異文化との疎通、主流/中心を眺める非主流/周辺の他者意 識、他者との共生と融和、僑民社会の和音/不協和音、移民者の生活 苦、精神的貧困、再移民、子供の教育と国際結婚を取り巻く世代間の 葛藤等が具体的に形象化された。隨筆もやはり、詩と小説で取り扱う 主題と大きく違わないが、ラテンアメリカの旅行談、異文化との疎通 と共生、宗教的ヒューマニズムなどが描かれる。

一方、このような文学的想像力と主題意識は『ロスアンデス文学』 の創刊号(『文学アンデス』)の発刊辞から早めに予告されていた。

我らは移民という二文字の前であまりにも多くを忘れ、捨てなければならなかった。それは新たな出発を意味するものであり、新たな楽しみの先に勇気を持たなければならないと思う。我々が生きていくのに最も重要なものは勇気であるように。

凜凜たる気性、硬い意志、苦難逆境を乗り越える力強い気迫、真実を求める硬い信念、あらゆる誘惑を克服し恐れに勝ち抜ける精神力、これら全ては我らが持たなければならない徳目だからである。移民30年の足跡を顧み、長くもないかけらを探って見れば、真に言葉や文字では形容できない事縁が数多く現われ、イグアスのように荒く力強く

力を注ぐこともできるはずなのに、我らは未だ待つしかない。惜しいが昼夜を分ける余裕がない。生活する者として渾身の力を注いで火を起こすべきなのだ。

このような苦悩や葛藤を克服した我らの現実を率直に扱った文を出版できるように協力してくれた皆さんに先ず感謝します。その間、胸の奥にしまっておいた郷愁を思い出しながら時々心の目でみて、感じて、経験してきたあらゆるものを誠意を尽くして描いてくれた文章を読みながら、これらが我らの姿であり、生であり、同質性を確認させる契機になったという点で感慨無量である。

我ら文人協会は結成されてからわずか三年しかたっていない。本という形で出すには足りないところが少なくないが、僑民社会に細やかな火種を蒔くという心であるということをご了解願う。私たちはこれからも更に精進するように頑張るつもりである。激励と勇気を与えてくれた皆様に心から感謝する。1996. 9. 在亜文人協会会長:イム・ドンガク。

このように《在亜文人協会》から発行された『文学アンデス』(創刊号)では、'僑民社会'の勇気と"真実を追求する堅い信念"を通して、'僑民社会'の"同質性を確認"し、移民開拓者としての"細やかな火種"で、"魂神の火"を燃やそうとするコリアン移民者たちの艱苦する希望のメッセージが込められている。もちろん、このような文学的想像力はコリアンディアスポラ文学の主体意識と軌を共にする。実際に、同じ南米地域である在ブラジルコリアン文学の想像力がそうであり、北米のアメリカとカナダのコリアンを初めとして、在日コリアン、中国の朝鮮族、旧ソ連圏の高麗人文学に至るまで、コリアンディアスポラ文学の主題意識は大きく違いはしない。それは、すなわち移民文学を含むコリアンディアスポラ文学の磁場の中にある移民者の他者意識と民族的アイデンティティに対する絶え間ない自己脱却作業でもある。

そのような意味で、『ロスアンデス文学』は形式的にもそうであるが、内容的にも移民文学の領域を越えて、コリアンディアスポラ文学でも重要な位置を占めているといえる。特にコリアンたちの移民の歴史が比較的短い南米大陸で『ロスアンデス文学』が産苦を重ねて、通巻12号まで発刊したことは、決して過小評価されることではない。たとえ、全地球村時代の超国家的な世界観にふさわしい脱境界的な文学的想像力が惜しさとして残されたとしても、確かなのは『ロスアンデス文学』が在アルゼンチンコリアン社会を振り返りながら'僑民社会'の"精神的架橋"としての役割をしてきたということである。

2. 移民史、個別創作集と作品

移民の歴史の短さを勘案すると、アルゼンチンに定着し生活しているコリアンたちの文学活動は貧弱ではない。まず、在アルゼンチンコリアン社会で発刊した移民史を初め、文学関連単行本をジャンル別にまとめてみると表2のようになる(表2参照)

このように(表2)一括してみると、在アルゼンチンコリアン社会で発行した単行本が多様なジャンルで、少なくない数であることがわかる。これらの単行本をジャンル別に整理してみると、まず在アルゼンチンコリアンたちの移民歴史を扱っている単行本は総4冊である。最初に発刊した移民関連の歴史書は1990年イ・ギョボンによって刊行された『アルゼンチン韓人移民史』であり、『アルゼンチン韓人移民史』の増補版である。在アルゼンチンコリアンたちの移民歴史を細密に扱っている増補版は"先着して生きた人たち"、"彷徨する草創期の移民者たち"、"針仕事で暮らした貧民村居住時代"、"中流階級時代の開幕"、"投資移民の大挙流入時代"に分けてコリアンたちの移民の足跡を時代別、業界別(衣類業界、宗教、教育、言論など)とする。

そして《在亜移民文化研究会》で発刊した『韓人社会97』(1998.8)

ジャンル	書名	著者	発行人	出版社	発行処	発行 年度	総 ページ
移民史 (4巻)	移民40年史	ソン・ジョンス, チャン・ ヨンチョル		大洋文化	アルゼンチン 韓人移民文 化研究院	2005	545
	アルゼンチン韓人移 民史	イ・キョホン	キム・ヨンギル	ソン・ヨン社		1990	301
	アルゼンチン韓人移 民25年史	イ・ギョボン	キム・ヨンギル	ソン・ヨン社		1992	429
	在亜韓人社会97	イ・ギョボン			在亜 韓人移 民文化研究 会	1998	501
文芸雑誌							
詩集 (8巻)	彼の空が露を降らすと ころ	シン・グンジョン 他 14名	キム・スンテ	イェヨンコミュニ ケーション		2004	221
	私が私に道を照らす	孟夏麟	キム・ジンス	韓国文化社		2008	144
	ブエノスアイレス、 2010	孟夏麟	ホン・ヘリ	ウム		2010	208
	上弦の月に掛った木 霊	曺美姫	カン・ボンジャ	文学手帳		2008	261
	鳥たちはペルーで鳴 かなかった	ペ・ジョンウン	シン・セフン	天山		1999	128
	タやけにかかったオー ベーリスク	ユン・チュンシク	キム・スンテ	イェヨンコミュニ ケーション		2001	186
	草の葉の中のインカ	ユン・チュンシク		文学手帳		2001	179
	空・海・星の光	キム・ジェスン	シン・ヨンホ	ヤンムンガク		2000	181
	カラボボのくぬぎの木	チェ・ウン	イ・ソヌ	ソヌメディア		2005	247
随筆集 (9巻)	風吹く日の散調	チェ・ウン	ソ・ジョンファ ン	いい随筆社		2009	186
	人々の間に道がある	カン・チョルス, チェ・ ウン, ファン・ソジ	ソ・ヨンウン	イジ出版		2007	228
	3匹のドラド	チュ・ソジョン 他 10名	チェ・ウン	Disegraf	チェ・ウン随 筆教室	2008	193
	異邦人の写真集	チェ・テジン	ファン・ムニョ ン	TALLERES GRAFICOS SU IMPRES S.A.		2009	212
	チクタクと時間は流れ ていくのに…	チェ・ヨンドク	チェ・ヨンドク	Av. Carabobo 3 3 0 1 A 4632-1337		2008	331
	韓国の母 他	コリナ・コルティス 他 13名	パク・ヒョンヨ ン		在アルゼンチ ン韓人会	2009	266
	芍薬の花	パトリッシア・スアレス 他 23名	エバ・ピッコロ	DISEGRAF	アルゼンチン 文化部	2002	382
	希望事項	ユン・ビョング	キム・コンジョ ン	中央日報南米 支社	中央日報社	1994	117
小説集 (1巻)	洗濯婦	孟夏麟	シン・セフン	月刊文学出版 部	韓国文人協 会	2006	223
自叙伝 (2巻)	枯れない根	チョ・ウンジェ	アン・ブソプ	真理と自由		1996	190
	韓人たちが描いた西 洋画	イ・ホンヨン	イ・ホンヨン	L O S TALLERES GRAFICOS		2006	391

表2、アルゼンチンで収集した移民史、文芸雑誌、個人創作物に対する整理-筆者

はイ・ギョボン(発行人)とソン・ジョンス(編集人)が主軸になって、まさに在アルゼンチンコリアンたちの社会、経済、教育、文化、宗教、体育にかかわる団体すべてを取り上げながら、各団体の活動状況(設立日、設立目的、活動内訳など)を具体的に紹介した。また『韓人社会97』は当時の"アルゼンチンの政治、経済、社会"紹介を初めとして、"韓人社会年表(1965-1996)"、"韓人社会声明書集"、"海外同胞北朝鮮故郷訪問"、"研究調査資料"、"研究論文"、"韓人社会人名録"などにも紙面を割愛した。『アルゼンチン韓国人移民40年史』(アルゼンチン韓人移民文化研究院、2005)は在アルゼンチンコリアンたちの移民歴史を総括したとも言えるし既存の時代別、業種別ではなく"主題別40年史"を中心として、コリアン社会の実生活と関連の深い経済活動、文化活動、宗教活動、学術活動、スポーツ活動、青少年活動に至るまで細密に紹介したという点で特徴的である。

在アルゼンチンコリアン社会で発刊された詩集は総8冊である。少なくない分量であるが、大体韓国出版社で刊行された場合が多い、実際に文壇デビュー (18) を経て活動する作家も少なくない。ここで創作詩集に対した内容を一々紹介することはできないのであるが、大体これらの詩集では故郷(祖国)意識、南米の大自然と移民者たちの日常、宗教的ヒューマニズム、内面的自我省察などを主題にする。例えば孟夏麟の『私が私に道を照らす』と『ブエノスアイレス、2010』は"ディアスポラ言語"で"多文化の可能性"と情緒的な安定を基盤に"果てのない挑戦と'道探し'余情"をみせつけた。そしてユン・チュンシクの『草の葉の中のインカ』と『夕やけにかかったオーベーリスク』は"南アメリカの自然風光と風物、それから歴史意識と遺跡"、宗教的ヒューマニズムに基づいた"存在に対する郷愁"(19) を示した点で注目される。

そしてペ・ジョンウンの『鳥たちはペルーで鳴かなかった』は"時間と空間の詩的宇宙領域を東西洋の反対感覚に代位させながら、祖国

と南米生活の苦しいエスプリを叙事的な叙情詩"⁽²⁰⁾ として昇華させた。曺美姫の『上弦の月に掛った木霊』は"過ぎた日々をことごとに呼び起こしながら'記憶'と'懐かしさ'の力を通じて新しい世界に進んで行こうとする想像的意志"を"激情と静けさの二重奏"⁽²¹⁾ で披露するという点で独創的である。またキム・ジェスンの『空・海・星の光』は超越的空間(空、海、星)を歌ったし、特に『彼の空が露を降らすところ』(イェヨン)はアルゼンチン、ボリビア、ブラジル、チリ、米国で活動するキリシタン詩人たち⁽²²⁾ の詩集という点で独特な意味を持っている。

随筆集もまた総9冊で少なくない数である。内容的には本の題目からでも分かるように、極めて叙情的で現実主義的な観点から移民社会の日常が描かれている。これら随筆集の中でもチェ・ウンの『カラボボのくぬぎの木』、『風吹く日の散調』、『人々の間に道がある』(共著)、『3匹のドラド』(共著)は特別な位置を占めている。特に代表作である『カラボボのくぬぎの木』は"風吹く日の散調"、"朝のために"、"帝王の苦悶"、"真実性の問題"、『3匹のドラド』は"別れの練習"、"トーレランシア"、"鴉とインディア"、"孤独は甘い"という内容構成を通じて、アルゼンチンで生きていくコリアン移民者たちの哀歓と郷愁を爽やかな言語で引き出している。

それからチェ・テジンの『異邦人の写真集』は異邦人として生きて行かざるを得ない移民者たちの孤独と浪漫を穿鑿していて、チェ・ヨンドクの『チクタクと時間は流れていくのに』は1965年移民出発からパラグアイ、アルゼンチンへ繋がる移民者の艱苦した記憶と体験を引き出している。また"母性と利他主義と義侠心"⁽²³⁾を開拓精神と希望事項で引き出したユン・ビョングの『希望事項』は《婦人会》会長としての経験を活かした至極教訓的な内容を表している。特にアルゼンチン人たちによって書かれた"アルゼンチンの中の韓国人に対する小さな話"を編んでいる『芍薬の花』⁽²⁴⁾と、韓国と縁を結んでいた

アルゼンチン人たちの書いた『韓国の母、他』はアルゼンチンに定着 したコリアンと居住国原住民との間の相互疎通と距離を狭めていった という点で意味がある。とにかく在アルゼンチンコリアン作家たちの 随筆集は移民社会の日常を素材にして緻密な自己観照と人生の濃縮さ れた経験を簡潔な文体で解くという点で独創的である。

小説集は孟夏麟の『洗濯婦』が唯一である。『洗濯婦』には総7編の短編小説が入っているが、主に在アルゼンチンコリアン社会でしか経験することのできない移民者たちの内面的自我省察、精神的貧困、子女教育と再移民をめぐった世代間の葛藤、居住国の原住民との葛藤などが表象される。特に移民者たちの追われる日常生活と精神的空虚を表象した'洗濯婦'の姿(「洗濯婦」)、"第2の家族"と思ってきた居住国原住民の裏切りと共生の論理(「第2の家族」)、異文化に対する異質感と帰郷意識(「換羽期」)などはアルゼンチンコリアン社会に常存する根源的な"壁"の実体と重さを文学的に形象化した作品である。

個人的な移民体験と記憶を叙事化した自叙伝にはイ・ホンヨンの『韓人たちが描いた西洋画』、チョ・ウンジェの『枯れない根』がある。『韓人たちが描いた西洋画』の内容は"文化教養"、"時事"、"韓人会、韓国学校、新聞"のコラム、"随筆"、"意見開陳文"という形態で構成されていて、チョ・ウンジェの『枯れない根』は移民者の一人として経験するしかなかった艱苦した体験を"私が去った日"、"暗闇に昇った太陽"、"裁縫をしながら教えたカ・ギャ・ゴ・ギョ"で構成して披瀝した。そして提示したジャンル別整理表(表2)には入ってないが、南米の政治評論としてキム・ヨンギルの『南米を語る』、地球村の"環境、国境、領土、民族、種族、宗教、海洋、人権"の紛争を扱ったチェ・ビョンヨンの『地球村紛争事例集』、韓半島の統一論を扱ったチェ・ビョンコンの『韓半島統一論』、『中立化統一論』がある。また、韓国語で翻訳された教養書としてホルセブカイ・シルビアサーリナスの『愛はどうやって始まるのか』(チョ・イルア訳)、アルゼン

チンのインディア部族を紹介したユン・チュンシクの『南米アルゼン チンインディア部族文化の多様性』、アルゼンチンの生活法律案内パ ンフレット『美しい未知の世界アルゼンチン』などがある。

また教育用ハングル教材2冊と日常生活に必要なものをまとめた『生活カステシャノ』(全3冊)も目立つ。ハングル教材『COREANO BASICO、初等教材韓国語』(教育科学技術部駐アルゼンチン韓国教育院)はハングルの母音と子音から習う学習者向けの初等教材で、『EL COREANO、中南米で学ぶ韓国語』は韓国語会話を初めとして、読み、聞き取り、書き中心に構成された学習教材である。そしてソン・ヨンソンの『生活カステシャノ』はアルゼンチンの日常生活で必ず必要な表現を集中的に紹介している。一方、宗教関連書籍は意外と多いほうで、『キリスト教教科書』外10冊 (25) がある。主にカトリック教と改新教会を中心として教会の歴史、宣教戦略などの内容を載せている。

その他にも《集まり、ウリドゥル》が発刊した定期刊行物『ウリドゥル NOSOTROS』、『週刊ウリドゥル』、『月刊ウリドゥル』を初め『戦友』(在亜ベトナム参戦遺功戦友会)、『カルジェ』(湖南郷友会)、『東亜韓人業所録』(南米東亜日報)、『写真から見る移民半世紀』などがある。これら定期刊行物の中でも《集まり、ウリドゥル》によって発刊された『ウリドゥル』、『週刊ウリドゥル』、『月刊ウリドゥル』は注目される。特に『ウリドゥル NOSOTROS』(創刊号)は草創期コリアン移民社会に"アルゼンチン銀行、学校入学、営業許可手続及び労働時間解説、アルゼンチンの歴史、伝説、そして第一教会青年部主催'文芸の夜'取材記など当時の現実的情報"(26) を紹介して、情報媒体として重要な役割を担当した。また『ウリドゥル NOSOTROS』(27) は時おりリレー小説、随筆、紀行文などを掲載して、単純な情報媒体としての役割を超えて精神文化的要素を重視し、『週刊ウリドゥル』と『月刊ウリドゥル』もまた現実主義的観点から'僑民社会'に情報提供と相互疎通を導き出すのに重要な役割を担当するのである。

一方、個別的な形で発表された文学作品には『海外同胞文学の窓』(在外同胞財団)に受賞作品で紹介された曺美姫の詩「カラボボのくぬぎの木」(第8回受賞作)、パク・ヨンヒの生活手記「夫の席」(第2回受賞作)、随筆「幸福な涙」(第3回受賞作)などがある。そして『ウリドゥル NOSOTROS』と『月刊ウリドゥル』に掲載された詩「川辺にて」(イ・ヒチャン)、「お姉さまへ」(オク・リョン)、「麦の粒のプライド」(ファン・ミョンゴル)、「野原にて」(クォン・ソクチャン)、「統一賦」(チェ・ヤンホ)、「あなたの姿」(イ・チュンリョル)、「終電で去ってきた旅人たち」(ムン・ヨンウン)、「私の季節」(ホン・ギョンソン)、「悲しい日」(ノ・ソンジュン)など、リレー小説「繋がらない地平線」(ユン・ソンヨン)、「ある殺人」(イ・ムンチョル)、随筆「ああ!南米の女人よ」(イ・ジンオク)、「109番」(パク・ヨヌ)、「あなたと一緒に」(キム・ミョンスク)、「間違った判断」(カン・セヨン)などは、在アルゼンチンコリアン社会の脱境界的混種性を文学的に描いた文化支点として理解することができる。

以上のように、アルゼンチンのコリアンたちによって発刊された単行本は移民歴史書を初めとして、文学 (詩、小説、随筆)、教養、宗教書籍に至るまでジャンルが多様である。大体コリアンの移民生活を根幹とする歴史的記録、社会文化的な活動、精神文化の追求、宗教的帰依、異文化との疎通と共生、異邦人意識のような問題が写実的に扱われる。特に文学創作集と作品で叙事化される移民者たちの内面意識は、一層根源的で実存的であるという点で注目される。例えば、移民社会という異質的な場所/空間で拮抗関係に表象されるしかないディアスポラの理想主義と現実主義、過去と現在の交差支点を文学的に形象化する点でそうである。また在アルゼンチンコリアンの精神文化に基づいた現実主義的視座に内在した文化的混種支点、そこから発信される未来指向的世界観が極めて教訓的で示唆的であることは言うまでもない。

Ⅳおわりに

この論文はコリアンディアスポラの中でも在アルゼンチンコリアン の移民の歴史と文学地形をとり、その文学支点をディアスポラ的世 界観と脱境界的混種性の論理で検討するのが目的であった。先に在 アルゼンチンコリアン社会の形成過程と展開様相を各種団体(《韓人 会》、《移民文化研究会》、《集まり、ウリドゥル》、《在亜文人協会》な ど)を中心に調べ、草創期アルゼンチンコリアンたちの文学関連団体 の成立過程と文芸雑誌、個別的創作集、作品などを具体的に調査、 整理した。特に《集まり、ウリドゥル》の定期刊行物『ウリドゥル NOSOTROS』、『週刊ウリドゥル』、『月刊ウリドゥル』、文芸雑誌『ロ スアンデス文学』の発刊経緯を初めとして発刊意味と内容上の特徴を 検討した。それから個別的に刊行された創作詩集、小説集、随筆集、 自叙伝、評論書を具体的にとりあげ、概略的ではあるが、ジャンル別 に主題意識を調べてみた。大体、創作詩集では故郷(祖国)意識、南 米の大自然と移民者たちの日常、宗教的ヒューマニズム、内面的な自 我省察を歌い、小説では移民創始期の厳しい定着ドラマ、周辺人とし ての異邦人意識、異文化との衝突、'僑民社会'の和音/不協和音、 子供の教育と世代間の葛藤、故郷(祖国)に対する郷愁、自己アイデ ンティティなどが文学的に形象化される。随筆では移民創始期の艱苦 した定着ドラマを含めて、コリアン移民社会の日常を簡潔な文体を通 じて観照的に解き明かしている。

このように在アルゼンチンコリアン社会は短い移民歴史に比べて少なくない情報誌、文芸雑誌、日刊紙、個別創作集が発刊され、各種移民史、自叙伝、生活情報書、宗教書籍が刊行された。このような在アルゼンチンコリアン社会の多様な情報媒体と個別的創作集は、艱苦な移民体験を記録するという歴史的意味もあるが、何よりも'僑民社会'内の相互疎通と異文化との共生、自己アイデンティティ探し、精神文

化の指向だと言える。だが、『ロスアンデス文学』を初めとして、在 アルゼンチンコリアン社会の個別的な創作物を通じて移民文学ないし ディアスポラ文学特有の多層的、越境主義を読みきるには多少限界が ある。脱境界的作家群と文学ジャンルをもとに主流と非主流、中心と 周辺を含む統合的視座が足りないからである。アルゼンチンを越えて 南米コリアンたちの相互交流をはじめ、居住国/主流社会との積極的 な文化疎通が要求されるところである。

それにもかかわらず、南米(ブラジル、アルゼンチン)に定着した コリアンの多様な記録物(創作)に対する具体的な資料調査と内容検 討は重要な意味を持つ。特に、現在までコリアンディアスポラ文学で 取り上げられなかった南米地域の文学地形図が、韓国現代文学の拡張 と新たな地平を開くのに根幹として作用するという点でそうである。 勿論、このような脱境界的な'混種性'に収斂される南米地域のコリ アン文化が、最近多民族、多文化社会に移動している韓国社会に与え る教訓的意味も少なくない。

- 1 筆者は2010年8月に日本法政大学の川村湊教授、守屋貴嗣兼任講師と共に、ブラジルサンパウロを中心に日系ブラジル人文学と在ブラジルコリアン移民文学に対する資料調査を行ったことがあり、2011年8月には同一の形でアルゼンチンで文学資料調査を実施した。特に2011年の資料調査の際には在アルゼンチン韓国学校のチョン・ギウン理事と曺美姫詩人が移民関連資料を紹介してくれた。この場を借りて深く感謝の言葉を伝えたい。
- 2 ユン・インジン、『コリアンディアスポラ』、高麗大学校出版部、2005、pp.8 ~ 11
- 3 アルゼンチンの国土面積は総 276 万 6,890kmで、世界 8 位であり、韓半島 (22.2 万km) の約 12.5 倍、南韓 (9.9 万km) の約 28 倍の大きさに当たる。全国土の 61% が肥沃な耕作可能地であり、人口は約 4 千万余名である。
- 4 中南米に居住するコリアンたちはブラジル (50,773 名)、アルゼンチン (22,354 名)、グアテマラ (12,918 名)、メキシコ (11,800 名)、パラグアイ (5,205 名)、ペルー (1,305 名)、エクアドル (1,300 名)、ボリビア (671 名)、ニカラグア (550 名)、ドミニカ (454 名)、パナマ (310 名)、ベネズエラ (293 名)、ホンジュラス (284 名)、エルサルバドル (249 名)、ウルグアイ (169 名) 順になる。世界的には中国 (2,704,994 名)、アメリカ (2,176,998 名)、日本 (904,806 名)、カナダ (231,492 名)、ロシア (218,956 名)、ウズベキスタン (173,600 名)、オーストラリア (132,287 名)、カザフスタン (107,130 名) 順になる。(韓国外交部通商部・在外同胞現況 -2011 年)
- 5 イ・キョボン、『アルゼンチン韓人移民 25 年史』、センヨン社、1992
- 6 カン・ヨンレは忠南論山出身として淑明女校を卒業し、1938 年中国の上海でイタリア大使館通信官であったイタリア出身男性(ロサリオ・グラッソス)と結婚する。以後二人はイタリアを経て1950 年アルゼンチンへ移民し、その後ロサリオは外航船通信技師として勤めた。(『アルゼンチン韓人移民25年史』参照)
- 7 アルゼンチンに入った反共捕虜は 1956 年 10 月 21 日に第 1 陣として 9 名、 1957 年 5 月 11 日に第 2 陣として 5 名が入る。一方、当時ブラジルに向かった反共捕虜は総 55 名 (中国人捕虜 5 名) であった。(イ・キョボン、『アルゼンチン韓人移民 25 年史』、センヨン社、1992 参照)
- 8 '109 村' はブエノスアイレス、プロレス区西南部一帯に定着した 1,050 世帯 が受容される単層連立住宅団地を称する。この連立住宅団地の正式名称はバリオリバダビアであるが、そこが 109 番バス終点地(出発点)だったので、

コリアン移民者たちが109村と呼んだのである。当時109村にはアルゼンチンの東西北部農村地帯の貧しい土着民と隣国のパラグアイ、ウルグアイ、ボリビア、チリなどから荒仕事のために来た移住者と共に住んでいた。彼らは1970年代コリアンたちを中心に衣類関連産業が本格化された際に重要な労働力を提供するのである。

- 9 金煥基、「在ブラジルコリアン文学の形成と文学的アイデンティティ」、『中南米研究』(第30巻1号)、中南米研究所、2010、p.33
- 10 1966 年設立されたアルゼンチンの《韓人会》は主に草創期のコリアン移民 者たちのなめるしかなかった永住権問題、不動産詐欺、病院入院、警察署と 関連した実生活問題を解決したり悩みを解決する役割を担当した。
- 11 在亜コリアン団体の当時公式ホームページは次のようである。(コンマグ: www.commac.com), (ブエノスネット: www.buenos.net), (コルネット: www.kornet.com.ar), (在アルゼンチン文人協会: http://kornet.com.cc/eca), (アルゼンチン韓国人学校: http://ica.adminschool.net) などである。
- 12 1972 年設立されたアルゼンチンの《集まり、ウリドゥル》は"与えられた 現実を直視し、青年世代の現実的葛藤を克服し、現地社会と韓人社会の橋梁 的役割を担当した。後世代の正しい教育的、文化的土台を創造し、閉鎖的な 移民社会に発展的で正しい方向"を提示するのが目的であった。
- 13『ロスアンデス文学』に掲載されたアルゼンチン作家の詩は総16編である が、通巻2号に5編[ルイス・アマヤ(Luis Amaya)「我らは共に成長し た (Creimosjuntos)」(キム・パンソク訳)、「慈悲、慈悲、慈悲 (Piedad. Piedad.Piedad) | (キム・パンソク訳)、アナヒ・ラザロニ (AnahiLazzaroni) 「傾斜(Declive) | (キム・パンソク訳)、「横顔(Pergil) | (キム・パンソク訳)、 マリア・セシルリア・モリナリ (Maria Cecilia Molinari) 「俺のそばの君 (CuentaCommigo)」(イ・ギオン訳) 」、通巻 3号に7編[ディオニシア・ア タナソプロ(DionisiaAtanasopulo) 「果物を吸込みながら(RespirandoFrutas)」 (ユン・ビョンハ訳)、「村には誰も (Nadie en el Pueblo)」 (ユン・ビョンハ訳)、 「童心の国 (El Pais de la Infancia)」 (ユン・ビョンハ訳)、ルイス・エステ バン・アマヤ・ローチャ (Luis Esteban Amaya Rocha) の詩 (キム・パン ソク1編意訳、3編原文掲載)が4編l、通巻5号に3編[ルイス·エステバン・ アマヤ・ローチャ (Luis Esteban Amaya Rocha) 「同日一日、悪い父と大人 セシリア・モリナー「反省 (Reflexion)」、「選択された詩 (PoemaElegido)」」、 通巻 8号に1編[マリア・セシリア・モリナー (Maria Cecilia Molinar) 「詩 (Verso) | (イ・ギオン訳)]がある。

- 14 『ロスアンデス文学』に掲載されたアルゼンチン作家の随筆は通巻 3 号に 2 編 [マリア・セシリア・モリナー (Maria Cecilia Molinari)「恐怖の自殺 (Muerte Anticipada)」(イ・ギオン訳)、シルビア・シュミッド (Silvia Shmid)「青 い蝶 (Mariposa Azul)」(イ・スンヒ訳)」がある。
- 15 『ロスアンデス文学』に紹介されたアルゼンチン作家の小説は通巻8号に3編 [ダニエル・レデスマ (Daniel Ledesma)「ユッノリ (NYOUT)」(チョン・ヘジン訳)、ロゲリオ・ボラガーシア (Rogelio Borra Garcia)「バラの持ち主は何時も他人 (Las rosas, casisiempre, son ajenas)」(キム・ソヨン訳)、パトリシア・スアレス (Patricia Suarez)「センプランシスコ行きの道 (Hacia San Francisco)」(イ・ギオン訳)]、そして通巻9号に1編[パトリシア・スアレスの「事業、その中の成功 (Los exitos en los negocios)」(チョン・ミファ訳)]がある。
- 16 權寧珉は文芸同人誌『熱帯文化』の刊行動機を"韓国人僑胞社会の内的成長" と"文化的葛藤を克服できる「精神的架橋」"と規定し、この雑誌の歴史的、 文化的、精神的な面の位置と意味を指摘したことがある。(權寧珉、「ブラジル に植えた韓国文化」、『文学思想』通巻198号、1982.4)
- 17 在ブラジルコリアン社会の総合文芸誌(同人誌)『熱帯文化』は、現在まで総9巻が発行されたが、現在は発刊中止の状態である。だが2011年12月頃第10号が発刊される予定である。『熱帯文化』は詩、随筆、小説を初め評論、紀行文、コントに至るまで多様な文学作品が掲載されている。(金煥基、「在ブラジルコリアン文学の形成と文学的アイデンティティ」、『中南米研究』(第30巻1号)、中南米研究所、2011参照)
- 18 在亜コリアン作家たちの中で、 曺美姫は 2006 年在外同胞文学賞と 2007 年『文芸春秋』、孟夏麟は 1966 年『自由文学』、ユン・チュンシクは 1999 年『自由文学』、ペ・ジョンウンは『現代文学』、 キム・ジェソンは 1999 年『海外文学』、 シム・コンジョンは 1996 年『時代文学』を通じてデビューした。
- 19 オ・セヨン、「脱文明的詩学の香気」、『草の葉の中のインカ』、文学手帳、2001、p.6
- 20 申世薫、「叙事的な叙情詩の一つの模型」、『鳥たちはペルーで鳴かなかった』、 天山、1999、p.127
- 21 ユソンホ、「激情と静けさの二重奏」、『上弦の月に掛った木霊』、文学手帳、 2008、p.261
- 22 詩集『彼の空が露を降らすところ』にはアルゼンチンから5名(シム・コンジョン、ユン・チュンシク、キム・ジェソン、イ・ユンシュク、チャン・ヨンカン)、ボリビアから2名(ユ・グクジン、シム・トクイム)、ブラジルから2名(ア

- ントニオ・アン、ヤン・ジョンソク)、チリから2名 (ペ・ジョンウン、キム・イェ リム)、アメリカから4名 (チョ・スン、ファン・ギョンラク、チョ・ユンホ、パク・スンチョル) が参加した。
- 23 シム・コンジョン、「本を作って」、『希望事項』、南米中央日報社、1994、 p.114
- 24 『芍薬の花』は"アルゼンチン連邦政府、駐アルゼンチン韓国大使館、在アルゼンチン韓人会"で共同主催した 2001 年韓国文化週間に実施した文芸作品公募展に当選された作品を集めた作品集である。スペイン語の作品を翻訳して両国言語に掲載された。金賞「芍薬の花」、銀賞「クァンスの家」、銅賞「死ね」を始め、優秀作「これ以上沈黙しない」、「アルゼンチンのある韓国人」など総 24 編が入っている。(エバピコロ (Eva Piccolo、『芍薬の花-La peonia y susombra』、アルゼンチン文化部、2002)
- 25 宗教関連書籍は『真実のために』(パク・ミンホン)、『基督教教科書』(パク・ミンホン)、『中・南米宣教戦略』(ユン・チュンシク)、『現代教会と宣教戦略』(ユン・チュンシク)、『自我が死ぬことで、信じる心が生きる』(チェ・ジンコン)、『神聖教会 30 年史』(神聖教会歴史編纂委員会)、『アルゼンチン韓人本堂 30 年史』(天主教在亜韓国殉教聖人聖堂)、『アルゼンチン純福音教会』(www.epleno.com)、『中央協会 30 年史』(アルゼンチン中央教会)、『生命の良識 365 日』(イ・サンセン)などがある。
- 26 『写真から見る移民半世紀』、p.11 (発行人、発行日不明)
- 27 『ウリドゥル』の創刊は1973年である。 2 回発刊されて中断、1976年に再創刊になる。筆者が確保した資料は再創刊された『ウリドゥル』(創刊号、1976.11)を始め、第 2、4、5、7、8、9、10、11 号、『月刊ウリドゥル』は1977年送年特集号と第 13、16、18、19、20巻、『週刊ウリドゥル』は1993年12に発行された1巻である。

参考文献

- 權寧珉、「ブラジルに植えた韓国文化」、『文学思想』(通巻 198 号)、文学思想社、 1989
- 金煥基、「在ブラジルコリアン文学の形成と文学的アイデンティティ」、『中南米研究』(第30巻1号)、中南米研究所、2011
- 金煥基、『在日ディアスポラ文学』、セミ、2007 ユン・インジン、『コリアンディアスポラ』、高麗大学校出版部、2005、

- イ・キョボン、『アルゼンチン韓人移民 25 年史』、センヨン社、1992
- ソン・ジョンス、チャン・ヨンチョル、『アルゼンチン韓国移民 40 年史』、アルゼンチン韓人移民文化研究院、2005
- チョン・キョンス、『ブラジルの韓国移民:人類学的接近』、ソウル大学出版部、1991
- 鄭夏源、アン・キョンジャ、チェ・グンジャ、『ブラジル韓人移民 50 年史』(ブラジル韓人移民史編纂委員会)、随筆文学、2011
- 《熱帯文化同人会》、『熱帯文化』(第1号~第9号)、1986-1995
- 《在亜文人協会》、『ロスアンデス文学』(創刊号 通巻 12 号)、在亜文人協会、 1996-2009
- 《在外同胞財団》、『在外同胞文学の窓』(第1回受賞作品集~第12回受賞作品集)、 在外同胞財団、1999~2010
- ※本論文は拙稿「在アルゼンチンコリアン移民文学の形成と展開様相(ハングル版)」(『中南米研究』第31巻1号、韓国中南米研究所、2012.2)の内容を加 筆修正して日本語に直したものである。